

Moby-Dick の秘儀性

前 田 禮 子

I. *Call me Ishmael.*

Moby-Dick は、*Call me Ishmael.* という文でもって始まる。私の名を Ishmael とでもしておこう、とあって、語り手が登場する。彼の名が Ishmael というのであるかどうか、じつのところ不明である。仮に Ishmael と呼んでくれ、といているのであって、彼が何者であるかわからないのである。

彼は Ishmael という名の仮面をつけた、言葉のみが湧き出してくるある実体 (entity) であって、姿かたちをそなえていないのである。Ahab やその他の登場人物の、映像としての特徴は、はっきり浮かび上がるのであるが、語り手の姿がどのようなものであるのかについては、なにも述べられていないので、わからないのである。語り手の、名も姿も、霧につつまれているのである。若者であって Pequod 号の一員である、という以外には、語り手の姿は見えないのである。

たしかに、語り手は、勇ましく活躍してはいるが、それでも彼の存在は、Queequeg の影のようなものである。行動の人と言葉の人、寡黙と饒舌、など、Queequeg と語り手は、たがいに他方を補完しあって、二人合わせて一人のような存在になってしまう。そのため、語り手の姿はさらに希薄になって、まるで風のような存在になってしまう。したがって、語り手ただ一人が生き残ることになるのだが、風のような存在には、失うべき姿かたちなどもちあわせていないのだから、我これを汝に告^{つげ}んとして只一人のがれ来れり “AND I ONLY AM ESCAPED ALONE TO TELL THEE.” という結末が矛盾なく導き出されることになる。

Ishmael の不死性は、Queequeg と Ishmael がギリシャ神話の双児兄弟 Castor と Pollux にたとえられる設定からも導き出される。Castor は母である人間の女 Leda の血を受けたために、やがて死すべき運命であるのにたいし、Pollux は父 Zeus の不死性を受けた。やがて Castor も Pollux も Zeus によって天に上げられ、双児座の星になったと伝えられる。双児座は船員の守護神であるとも伝えられる。Castor と Pollux は、ギリシャ神話によると、アルゴー船に同乗して金羊毛探求の旅に同行した英雄であった。白鯨探求




の航海とアルゴ―船による金羊毛探求のそれとが重ね合わせられているのは、いうまでもない。語り手の不死性・神話性は、*Moby-Dick* に冒頭から織りこまれた設定である。

すでに述べたように、Ishmael という名は語り手の仮面であって、彼には、いわば、顔がないのである。顔がない、ということについては、鯨も同様である。正面からみると、Moby Dick の顔は、そびえ立つ白い壁であるだろう。その壁はまた、仮面である、と Ahab はいう。Ahab は、その仮面を突き破って、仮面の彼方にあるものを見きわめようとする。仮面の裏側とは彼岸の世界であって、かたちある物質の世界ではない。物質の裏側を見るためには、Ahab 自身もかたちある物質のからだを捨てなければ、その世界へ入っていくことはできない。仮面の裏側は、いわば、物質の裏の、影 phantom の支配する領域である。そこは、なにもない虚無の世界であるかもしれないし、あるいは、太古より数知れぬシャーマンや予言者たちによって語りつがれてきた、あの神秘的な、不死の世界があるかもしれないのである。Ahab は、無いかもしれないが、あるかもしれない、その神的世界に賭けることにしたのである。Ahab は、Moby Dick を打ち取るためというよりは、Moby Dick の中へ没入し、不死身の白い鯨が導く世界へ移行しようとした、というべきだろう。Ahab は、生きたまま、ふたたび Nuntucket へ帰ることなど考えていなかったのである。

出エジプト記では、神は、モーゼと少数の選ばれた人のほかには顔を見せておられない。語り手 Ishmael も顔をもたない。語り手が、ギリシャ神話の概念からは、伝達者であるヘルメス神としての、また、旧約聖書にもとづくのだとすると、神の言葉をあずかる預言者としての、なにかそういった神秘的機能をもつ存在であると意図されて、物語を語りはじめるにあたって、まず、それが、示されているのである。その儀式的呪文ともいえるのが、Call me Ishmael. という語句である。

Call me Ishmael. この文は、三語からなるのであるが、両端の二語は、柱のようにそびえ立つ。その二本の柱の中央には、わたし me が小さく立っている。また、Call の C と Ishmael の I が大きく綴られて、この二文字が強調されているのに気づく。また、*Moby-Dick* の各章をあらわす数字は、アラビア数字ではなくローマ数字で、初版では綴られていた。CHAPTER I の数字が、1 ではなく I と綴られていたことには、そのための意図があったと考えるべきだろう。I の文字は、数をあらわしていると同時に、一人称の、わたしをあらわすこともできる。このわたしは、Melville 自身であってもよく、また読者各人であってもよいだろう。*Moby-Dick* という物語は、わたしという自己から始まり、自己自身の魂の遍歴の神話である、という認識のもとに読むこともできる、という設定になっているのである。

Call me Ishmael. という文章から、I と C の文字記号に注意を払って読むように、というメッセージを受けとったことにして、CHAPTER I を眺めてみると、この 'Loom-

ings'の章には、CとIの文字がちりばめられているのである。これについては、『『白鯨』—そのヘレニズムとキリスト教思想』で、すでにある程度述べた。Melvilleの他の作品、'I and my Chimney'という短篇小説の表題にも、両端の、IとCの文字が強調されていると考えられるのだが、この配例では、CとIが逆になっている。しかし、自己自身がなにより最重要であるというMelvilleの意志表示にかわりはない。'I and my Chimney'という語句には、さらに工夫がある。煙突Chimneyは、かたちを簡略化した図であらわすと、Iの文字そのものになる。と煙突は、同一化されて、すなわち煙突、となってしまう。'I and my Chimney'という語句は、屹立するわたし自身、をあらわすことになってしまう。

文字を図像として眺め、そのイメージを拡大していくという手法は、Melville独自のものであるかもしれないが、Melvilleがなにかに触発されて、こういった手法を案出したということがありうるかもしれない。というのは、同年に出版されたHawthorneの*The Scarlet Letter*が、Aという文字に重要な意味をもたせて、その文字を中心に物語が運ぶ筋立てをしているからである。どちらがどちらに影響を与えたのかは、言いがたいものがあるが、創作中の作品の内容や進行状況について、Melvilleは純朴にも、Hawthorneに逐一報告していたふしがある。*Moby-Dick*のQueequegと、Hawthorneの*The Wonder Book*のQuicksilverとは著しく類似しており、QuicksilverはQueequegから示唆をえたであろうことは想像にかたくない。HawthorneがMelvilleの発想にあzuかった可能性は、きわめて大きいのである。Hawthorneの、素材の扱い方が比較的単純であるのにたいして、Melvilleのばあい、きわめて複雑で意図を見きわめ難い。その、読者の理解を拒んでいる点が、Melvilleの技法のまづきであるとみなされてしまっているのである。作品の主題を伝える、いわば、標識として、特定の文字を象形記号化してしまう方法は、のちのImagism運動と相通じるものがある。

IとCの二文字だけでは、*Moby-Dick*を解く鍵としてはまだ不十分である。欠かすことのできない、さらにもう一文字が、透かし出されるべく伏せられているのである。それが、Hの文字である。*Moby-Dick*の物語の意味(signification)を完結させるにあたって、Hの文字が内包する秘儀性を見過すことはできない。なぜなら、IHCと綴ると、In Hoc Salus = In this (cross) is salvationとなって、この三文字は、イエス・キリストを示す語になってしまうからである。

II. ETYMOLOGY — 神人合一

神秘思想というものが、古くから伝わっているのだが、これについて述べてみたい。ETYMOLOGYの、短い解題の文章によって、*Moby-Dick*の本質は神秘思想にある、と示されている。*Moby-Dick*は、きわめて宗教的な、深い瞑想の書であり、人の潜在意識

をとらえて離さぬものがある。*Moby-Dick* は、物語りであるから当然である、といった域をはるかにこえて、イメージにみちているのである。*Moby-Dick* は哲学の書であるともいわれているが、哲学の書は、イメージが少なく、抽象概念で語られることが多い。*Moby-Dick* の語り方は、抽象概念によらず、イメージを多用するのであるから、独自の手法によるといえるである。語り手 Ishmael は、押しよせる潮^{うしお}のように、言葉をつらねるのであるが、結局よくわからない、という印象を与える。イメージをつみかさねる手法がとられているので、物語でありながら、詩的な説明方法がとられているのである。Melville は、膨大な量の詩を残して、詩人としての評価が高まりつつあることから、もっともな手法と思われる。

イメージを並列させる、というよりむしろ、重層させるところに、Melville の文体の特色がある。*ETYMOLOGY* に、中学校 grammar school の図書館員 sub-sub librarian が補助仕事に励む姿と、その背後に、超人的な導師の、威厳にみちた幻の姿が見えかくれする二重構造については、すでに述べた。この、イメージの二重構造が、*Moby-Dick* の技巧の特色である。すべての宗教の究極の目的は、神人合一という神秘思想であって、Melville が *Moby-Dick* で工夫した文体は、神と人が合一する、というイメージをつくることにあったのである。*Moby-Dick* には、聖書からの、またその他の古典からの言及が多く、ときに、わずらわしいほどのものであるが、それは何百年もの長い年月をへて言及され考察され、増幅された言葉の意味と相乗するように、Melville が言葉を持ちいて、神秘思想の深みをとらえようとしたためではないか、と思われる。一つの言葉が多くの意味を乗せて共鳴しあう、一つの言葉でありながら多重和音になって多くの意味を反響させる、多くの言及をちりばめる、というのが、*Moby-Dick* の文体の特色である。そのようにして、あいまいさ、不可解さ、深遠さ、が引き出されるのである。聖書の言及が多いにもかかわらず、無神論の作品と評され、不条理さが前面に押し出されて、*Moby-Dick* はきわめて現代的な作品になっているのである。しかし他方、一つの言葉の中に、あまりに多くの意味の交響があって、残響のからみあった、そういった文体になっているのも事実である。これでは作品の意図が伝わらないので、明確な解釈を導くために手引きが用意されているのである。言葉の迷路をかきわけ解答を手にするためには、言葉の枝葉は無視し、言葉の語源に、言葉の根本義に注目せよ、ということになるのである。

ETYMOLOGY の、中学校図書館の補助職員が、入信の初心者の手をとって教え導く偉大な師のイメージと重なり合っていることについて考えてみる。一人の人物の現世的な姿が、もう一人の、さらに偉大な人物の幻影 phantom と重なりあわさって一致するというイメージ構成は、ある意味では、神人合一を模倣した神秘思想を暗示している、といえないだろうか。*Moby-Dick* の物語自体が Melville の想像による phantom ではある

が、それはさておき、形あるものとしての、たとえば Ahab といった登場人物が、Ahab 自身の想像の中でえがいた phantom と合一しようとねがうとき、Ahab の目的は、ある種の神人合一であるといえないだろうか。Moby-Dick の文体の特色は、イメージによって語らせようとする点であり、語られた部分ではなく、語られていない部分に、真の意図がかくされているのである。語られているものは語られていないものをたぐり出すための手掛り cue にすぎないのである。雄弁と沈黙はしばしば対比されるが、この作品では沈黙が雄弁よりはるかに大きな比重をもつのである。Melville はなぜ、このように、隠すことにこだわるのだろうか。その理由は、一つには、Melville は自然を模倣しているからである。自然は、沈黙し、説明をしないからである。

形あるものと、形のないまぼろし phantom が一つに重なるというのは、神秘思想の中心概念である。聖書も、ギリシャ神話も、イスラム思想も、また佛教も、奥義はすべてこの点にある。奥義にはすべて、神人合一の概念がある。そのような合一を暗示する神話が伝えられており、聖書では、人は神の似姿として創造されたという話であり、ギリシャ神話では、自己の映像と対峙するナルシスの話である。

Moby-Dick には、ギリシャ的なものが多分に組みこまれているのだが、では、どのようなものをギリシャ的であるとみなすのかについて説明しなければならない。ギリシャ神話が、plot として、白い鯨を追い求めることと金羊毛を探求することと重なっている、などなど、そういった表面的な筋立てと、その筋立ての内側にあるギリシャ神話の精神ともいうべきものとが不可分に、Moby-Dick のなかにあって、作品を構成しているのである。

また、なにをもってギリシャ的なものとするのかといえば、それはアポロに由来するものとディオニソスに由来するものとである、ということができよう。アポロ的なものとディオニソス的なものとが、ギリシャ神話の、宗教としての根幹である、とおもわれるのである。アポロのもつ明るさとディオニソスの暗さとは、正反対のもののようにおもわれるけれども、両者は、きわめてよく似ているのである。

アポロは太陽神であるとされ、弓矢をもつ光り輝く神である。音楽と予言を司る神である。ディオニソスはバックスとも呼ばれ、農業神・酒神であって、葦笛がたくみである。ディオニソスが支配するのは、欲情と陶酔と混沌の世界である。アポロは、夜と昼とを往来して、冥界・地上界・天上界に精通する神である。アポロが予言・占いの神であるのは、アポロが一日の半分以上を冥界で過ごし、冥界をよく知っているからである。ギリシャの宗教は、初期のきわめて人間的な神々の変身譚の時代から、やがて魂の復活をねがう、ディオニソスの秘儀伝授の宗教へと移っていく。すでに、アポロの神託を告げる神殿の巫女がいたアポロ賛美の全盛以前の、もっとも初期に属する神話のなかに、人間を永遠に不滅の身に変えようとするデメーテルの話があった。

III. 酒の罫

第CI章‘*The Decanter*’では、イギリスの捕鯨船の陽気さ加減が語られている。積みこまれた食料や酒類の量がどれほど豊富であって、どれほど気前よく分配されているかについて、語られている。Melvilleは、史実にもとづく資料をかかげて、銜学ぶりを示しているかに見えるのだが、そういった、事実にもとづくという外観は、*Moby-Dick*の解釈にあたっては、いつも疑ってみる必要がある。たしかに、ある程度までは事実にもとづいているだろう。しかし、Melvilleの示す事実は仮面であって、その仮面の裏にある意図を読みとる必要がある。

‘*The Decanter*’の章の、資料として示されている数字について考えてみる。その資料は、

牛肉	400,000lbs. of beef	
フリースランド豚肉	60,000lbs. of Friesland pork	
干し魚	150,000lbs. of stock fish	
ビスケット	550,000lbs. of biscuit	
やわらかいパン	72,000lbs. of soft bread	
バター	2,800firkins of butter	
テキセルおよびライデンのチーズ	20,000lbs. Texel & Leyden cheese	
チーズ(おそらく下級品)	144,000lbs. cheese(probably an inferior article)	
スイスのジン	550ankers of Geneva	
ビール	10,800barrels of beer	(p. 569)

となっている。この統計表は、180隻の船団の約12週間分の食料と酒であって、各船には30人の船員が乗っていると考えられる、とある。Melvilleの解説によると、単純計算して船員の総数は5400人になり、ビール10800樽では、各船員は2樽もらうことになる。さらにジンも積んでいるので、酒の消費量は相当なものになる。読者はその量の多さに圧倒されてしまう。

この統計表にたいして、Melvilleはまた、つぎのようにいう。

At the time, I devoted three days to the studies digesting of all this beer, beef, and bread, during which many profound thoughts were incidentally suggested to me, capable of transcendental and Platonic application; and, furthermore, I compiled supplementary tables of my own, touching the probable quantity of stock-fish, &c., consumed by every Low Dutch harpooner in that ancient Greenland and Spitsbergen whale fishery. (p. 570)

語り手は、3日間解明にかかりきって、このビール、牛肉、パンをむさぼったのだが、その間、多くの深遠な想念がうかび、それは、超驗的プラトンの道にすら通じるものだった、という。この統計表は、しかし、事実にもとづいたものではないのである。Melvilleのいう、プラトンの深遠な想念が、どのようにこの数字には含まれていることになるのだろうか。

各数字を隻数の180で割ってみることにした。最後にあげられているビールの数字以外は、割り切れないのである。割り切れるものもあるのだが、人数の30で割ってみると、結局、割り切れないのである。船の料理人の胃袋の大きさを考慮に入れても食料は十分すぎる量である、と書かれているのは、数字が、割り切れないので無限に数字が出てくるのをいっているのである。

割った数字を並べてみる。

牛肉 $400,000 \times \frac{1}{180} = 2222.22222222222222222222222222222222\cdots$

フリースランド豚肉 $60,000 \times \frac{1}{180} = 333.333333333333333333333333333333\cdots$

干し魚 $150,000 \times \frac{1}{180} = 833.33333333333333333333333333333333\cdots$

ビスケット $550,000 \times \frac{1}{180} = 3055.\underline{\overline{555555555555555555555555}}\dots$

やわらかなパン $72,000 \times \frac{1}{180} = 733.33333333333333333333333333333333\cdots$

$\text{バター} \quad 2,800 \times \frac{1}{180} = 15.\dot{5}$

デキセル・ライデンチーズ $20,000 \times \frac{1}{180} = 111.111\cdots$

下級チーズ $144,000 \times \frac{1}{180} = 800 \cdots$ 割り切れ

$$800 \times \frac{1}{30} = 26.\overline{6}$$

スイスジン $550 \times \frac{1}{180} = 27.5 \cdots$ 割り切れ

$$275 \times \frac{1}{30} = 9.1666666666666666666666666666666666\ldots$$

(1 アンカー=10ガロン)

ビール $10,800 \times \frac{1}{180} = 60 \cdots$ 割り切れ

$$60 \times \frac{1}{30} = 2 \dots \text{割り切れ}$$

割り切れない数字は、割りつづけると永遠に溢れ出てくるのである。割る divide という語には、分配する、の意味も入っている。上にあげた食料の数字は、詭弁学上は、文字どうり無尽蔵であって、どんなに大盤振る舞いをして消費しきれるものではない。それにたいしてビールは、どんなに潤沢なようにみえても、定量しか与えられていないので、飲み尽くされるのだということが示されている。

Most statistical tables are parchingly dry in the reading ;not so in the present case, however, where the reader is flooded with whole pipes, barrels, quarts, and gills of good gin and good cheer. (p. 369)

多くの統計表は読んで無味乾燥なものだが、これはそうではなく、読者は、管から樽から瓶から溢れ出してやまない上等のジンと珍味との洪水を浴びる、とあるが、数字の

洪水を浴びる、ということだろう。

引用文の中の、gin という語は、綿繰り機、狩猟用のわな、一輪滑車、綿繰り機にかけて種を分ける、わなにかける、などの意味にも使われているのである。この章にかぎらず、駄弁を弄するとおもわれる章には、Melville の隠れた意図と技巧が伏せられているのである。

つぎに、Ishmael のいう超驗的プラトンの思索について考えてみる。

Yes, and we flipped it at the rate of ten gallons the hour ; and when the squall came (for it's squally off there by Patagonia), and all hands — visitors and all — were called to reef top sails, we were so top heavy that we had to swing each other aloft in bowlines ; and we ignorantly furled the skirts of our jackets into the sails, so that we hung there, reeled fast in the howling gale, a warning example to all drunker tars. However, the masts did not go overboard ; and by and bye we scrambled down, so sober, that we had to pass the flip again, though the savage salt spray bursting down the fore-castle scuttle, rather too much diluted and pickled it to my taste. (p. 567)

Samuel Enderby 号という船には、Ahab がそこで交歓をしたあと、長い月日が過ぎてから、Ishmael はふたたび交歓をすることになる。1 時間に数10ガロンもの酒が汲み交わされて、一同楽しい時を過ごしていた。「そのとき急に風雨がでて(パタゴニアあたりの沖合では風雨が多い)、みなが——乗客ともどもに——、上檣帆を縮める命令を受けたときには、すっかりふらふらで、たがいに孕み索に放り上げっこしなければならなかった。それから、うっかりして自分たちのジャケッツの裾を帆の中に巻きこんだものだから、しかと締めこまれて、咆吼する疾風の中にぶらさがり、酔っぱらい水夫どもへの見せしめになったのであった。だが帆柱は倒れ落ちなかったから、われわれはぼつぼつと這い降りてきたが、その時にはまったく酔がさめていたので、ふたたび飲まずにおられなかった。だが、荒れくるう海水のからい飛沫が船首楼の天窓にそそぎこんだので、ひどく水っぽく塩っぱい酒になっていたと私の舌には感じられた」この文には、ふたつの隠れた意味がある。ひとつには、水夫たちは快よい銘酩に心を奪われた状態で帆柱にがんじがらめになっていた、とあるが、この場面は、ユリシーズがサイレンの歌声を聴くために、帆柱にからだを縛りつけてもらった、という話と共通するものがある。また、酒の味が吹き荒れる風と塩水で薄くなった、というのは、上にあげた小数点以下の数字が、溢れ出てくるとはいえ、限りなく希薄になっていくのを示しているのだろう。

Samuel と息子たちの商会は1819年に船を仕立て、遠い日本の海域まで試験航海に出たのだが、その船の名は、ふさわしくもサイレンというのであった。

In 1819, the same house fitted out a discovery whale ship of their own, to go on a tasting cruise to the remote waters of Japan. The ship — well called the “Syren” — made a noble experimental cruise ;... (p. 566)

この個所の、試験航海は、tasting cruise と綴られているが、編者の Ch. Feidelson は、testing cruise と綴るべき、と注釈している。しかし、海水の飛沫が昇降口から吹きこんで、酒の味が塩辛く漬物の味がする the savage salt spray bursting down the forecastle scuttle, rather too much diluted and pickled it to my taste という文と tasting cruise という語とは対句になっているのである。そのため、試験航海をあらわす語は testingではなく、味覚をあらわす tasting という語のままで、tasting cruise が適しているということになる。

水夫たちが酔いしれ、帆柱に固定されたまま嵐の中を駆けぬけるのはよいが、そのまにも海水が昇降口からなだれこんでくる。酔いがさめると、ふたたび飲んで帆柱に昇る。やがて酒は無限にうすくなり、時間もつきる。現世の悦楽にふけっていると見失うものがある、ということではないだろうか。サイレンの甘美な音楽は破滅を誘うものである、というのが‘The Decanter’の章の主旨であろう。第 CXV 章の Bachelor 号の寓意と同じものであろう。

‘The Decanter’の章には、食べ物¹の比喻が多い。Ishmael はいう。あの交歓はすばらしかった。水夫たちは、みな好漢だった。太くみじかく生き、ほがらかに死ぬ連中よ。

It was a fine gam we had, and they were all trumps — every soul on board. A short life to them, and a jolly death. (p. 567)

現世の、日々営まれる生活の中で、もっとも大きな幸せを与えるものには、豊かな愉快な食事があるだろう。

見よ、わたしの見たことはこうだ。神に与えられた短い人生の日々に、飲み食いし、太陽のもとで労苦した結果のすべてに満足することこそ、幸福で良いことだ。それが人の受けるべき分だ。それを享受し、みずからの分をわきまえ、その労苦の結果を楽しむように定められている。これは神の賜物なのだ。(コヘレトの言葉 5: 17-18) (新共同訳)

上の引用文では、統計は無味乾燥なものだが、このばあいは、そうではない。読者はジンや歓声を洪水のように浴びせられるのだ、といている。割りきれない数字が無限に続くのを、洪水のように、といているのであるが、さらにこの文には、酒にかられた大騒ぎの場面が、透けて見えるのである。

Pipes, barrels, quarts and gills は、いずれもブドウ酒などの容積の単位であったり、それらの容器である。pipe(s) には、間欠泉の噴出路、酒が溢れ出てくる導管、さらには、楽器の笛という意味がある。barrel(s) には、手回し風琴 (barrel organ) という意味があって、quart(s) には、四度和音 (quartals) という音楽用語がかかっている。gill(s) には、水差し (water pot)、小川の細流、ブドウ酒の単位 (fluidounces) などのほかに、鰓^{えら}、あごの下²の肉などの意味があって、人がのどをふくらませて大音声をあげているさまがうかがえる。

Ⅳ. ETYMOLOGY ——文法学校

Moby-Dick の冒頭の、ETYMOLOGY (「語源」) (p. 3) という挿入文については、すでにある程度の解釈をこころみてきた。そこに書かれた言葉のそれぞれが、二重構造になっており、どの言葉も表面上の意味と、表面からは見えにくい別意とをふくんでいる。それぞれの言葉の、表層の意味（かりに小意と呼ぶ）をつないでいくと、地味な文献探しの仕事に生涯をついやした、一人の哀れな助教師の姿がえがかれているのだが、この文の別意をつないでいくと、この世のものとはおもわれぬ、まぼろしの導師の、人の姿が浮き出てくるのであった。GRAMMAR SCHOOL という語句を、*Moby-Dick* が書かれた頃の初等中学校として理解したばあい、ETYMOLOGY の一文は、そこで働き、若くして世を去った助教師のための碑文であると解釈できるのである。さらに、この文に示されている the pale Usher は、大文字で記されており、案内者、仲介者といった霊的、神的な人物像として示唆されていると考えざるをえない。

一方、GRAMMAR SCHOOL を文法学派、と解することも可能である。英国で16世紀に創設され、ラテン語文法を教えるのが目的である文法学校があった。言葉の字義や字典を研究する学校という意味であるから、*Moby-Dick* の中で使われている言葉の語義を広く原義や語源にまで引照して、作品の意図をきわめるように、という但し書きとして、ETYMOLOGY と題された一文が置かれている、と理解することもできる。さらにまた指摘できるのは、文法学派と呼ばれる学派が存在した、ということである。

B C 2300年頃から、人類最古の、といわれる文明が、インドのインダス河流域にあらわれた。ヴェーダの宗教の思想がそれであって、その哲学思想は一元論であり、ヒンズー教や大乘佛教の源流である。ヴェーダ (Veda) は「知る」を意味する動詞の語根から造られた名詞で、知識書とくに「宗教的知識を意味し、転じてその知識を収載している聖典の総称となった。ヴェーダ聖典の一部はウパニシャッド (Upaniṣad 奥義書) とも称され、秘説の集成書であり、ヴェーダ聖典中、哲学的思惟の極致を示している。広義のヴェーダは、讃歌・祭詞・呪詞および祭儀書・神話・伝説・森林の中で教えられるべき秘儀などをふくむ。ヴェーダは人間の著作ではなく、聖仙が神秘的靈感によって感得したものとされ、口伝によって今日まで伝えられてきた。ヴェーダ研究として、音声学・祭事学・文法学 (Vyākaraṇa)・語源学 (Nirukta)・韻律学・天文学の六種があった」(前田専学著「インド思想史」、東京大学出版会、p. 10)。

Moby-Dick の作品のまず初めに、語源学、文法学派といった言葉が偶然に並べられているとは考えられない。Melville が古代インド学の知識にふれていたのは疑いえない。*Moby-Dick* の中には、文法や語源に加えて、音声、祭事、韻律、天文の、上記の六種の知識が網羅され、駆使されている。物語としては、*Moby-Dick* は、ホメロスの『イリアッド』と『オデュッセイ』にくらべられたりもするが、*Moby-Dick* の全篇に徹底して見

透かすことができるのは、秘儀としての、秘密の知識の伝授としての意図である。*Moby-Dick* は、形式は英雄ユリシーズの叙事詩を借りているが、かくれたところでは、『ウパニシャッド』をまねているのである。

ヴェーダ研究にあたっては、正統バラモン系統の体系のなかに、文法学派の言語哲学が打ちたてられた。古代インドのアーリア人は、言語そのものの本質を追求して、意味論、言語の本質論など、言語理論を展開した。文法学はヴェーダ聖典を理解し、維持するための学問であるとされた。文法学は内観の学であり、その目的はブラフマンの知識を得ること、すなわち解脱であるとされた。ブラフマンは語よりなり、語を本性としており、語は万有の本質を形成していると説く「語ブラフマン論者」(Sabdabrahmavādin) または「語一元論者」(Sabdadvaitavādin) という学派があった。

語の正しい意義用法を修得・実行するという文法学の任務を全うすることが、最高我の完成、ブラフマンへの到達であり、これが解脱であるとされた（前出「インド思想史」、p. 137～140）。

Emerson は「梵天」(‘*Brahman*’) という詩をつくっている。Melville は、Emerson の超越主義 (Transcendentalism) を継いで、*Moby-Dick* を書いたと評されることもあり、Melville にインド宗教哲学の知識があっても不思議ではない。インダス河流域で発祥した精神文化がその地から東西に伝播したのであるから、世界の大きな宗教思想・神秘思想・神話的思考がいずれもどこか似ていても、不思議ではない。Melville は大乘佛教に魅かれ、辞書などから佛教の知識を得ていたが、彼の佛教は、ヴェーダやバラモン教に由来する、きわめてインド的な哲学的な、ある意味では無神論とおもわれるほどの、超神論であるだろう。Melville の作品には、どこにも神や救いが見えず、無神論者であるとか異端者であるとか評されながら、Melville のひたむきな宗教心や求道心を否定することは不可能である。読者を魅きつけてやまない理由は、Melville のインド哲学的世界観や宗教観にあるのではないだろうか。Melville の作品にみられる、毅然とした諦観は、大乘佛教にも通じるものである。

以上述べたことから、*ETYMOLOGY* という措辞が置かれた理由の、重要な意義 (The signification, p. 3) が理解できるだろう。

ETYMOLOGY は、みまかりし助教師の墓碑銘であると同時に、この碑文から第三の人物像が浮かび上がってくる。それは、古代インドバラモン教の、語源学派か文法学派に属する僧侶であって、宗教や哲学の奥義を言語の分析によってとらえようとする姿である。*Moby-Dick* には、墓碑銘は三ヶ所にわたって記されている。最初は *ETYMOLOGY* において、つぎは第 XXIII 章の ‘*The Lee Shore*’ が Bulkington に捧げられたものとして、そのつぎは第 VII 章 ‘*The Chapel*’ においてである。この *Chapel* の壁面に飾られた大理石の石板に刻まれた、四人の水夫のための碑文の文面は、すべて Melville の

創作であって、じっさいの New Bedford にある Seamen's Bethel にある文面とは、まったく違ったものになっている。Melville によるこれらの墓碑銘のすべては、*Moby-Dick* のいわば至聖所を開く鍵になっている。‘*The Lee Shore*’ と ‘*The Chapel*’ の章で、それぞれの章の意義について述べることにする。

ETYMOLOGY として p. 3 と p. 5 の二種類があって、とくにあとの ETYMOLOGY (p. 5) が、これまで不可解とされてきた。ETYMOLOGY (p. 3) をかりに ETYMOLOGY 1 とし、ETYMOLOGY (p. 5) を ETYMOLOGY 2 として、ETYMOLOGY 1 に語源学派や文法学派についての暗示があるのは、ETYMOLOGY 2 で、とくべつの注意を払うよううながされている H の字の本質を洞察しなければならない、ということになるだろう。

言語こそ、思考や思想を構築していくための種子であり、思考や思想が樹木となり森林となって、成長していくための生命を宿しているとみなし、言語の最小単位である一つの語を、さらに文字の一つ一つにまで及んで、言語の本質をきわめよう、ということであろうか。*Moby-Dick* という、いわば神秘書をとく鍵は、H という文字にあるというのが、語源学に起源があるのではないかとおもわれる例が、ほかに二、三ある。聖書に、神がみずからの本質を説明して、わたしは A であり Z である、アルファでありオメガである、と述べられたとされる。佛教の観無量寿経に、無量寿の世界を観る方法の一つとして、阿字観があげられている。阿字観というのは梵字のアルファ、つまり A の字を観想するということである。現代のアメリカでも、A の字こそ、という認識があって、A の文字を無限に内蔵する図案を紋章化してもちいている。Ahab が、“Ahab is Ahab”. というとき、彼は、Ahab という名は A の文字ではじまり、A の文字が内蔵されている、と言っているのである。梵字（サンスクリット語）の一つ一つは種字である、という概念は、真言密教ではよく知られているものである。

H のみならず I と C、その他の文字も、*Moby-Dick* の秘儀を顕わす種子としてもちいられている。とくに第 I 章 ‘*Loomings*’ では、I や C の文字の文中での、使われ方の用例が数多く示されていて、H の文字の解釈のための、読者にたいする手ほどきいふべきものがある。第 I 章は *Moby-Dick* に入っていくための、初心者にたいする入門書(マニュアル) になっているのである。

白い、とくべつの鯨が *Moby Dick* と名づけられているのだが、Moby には、Mobile [móubəl, -bi:l]、可動の；移動する；といった意味があるだろう。molile には、水銀・エーテルなど、流動性の、という意味もある。ところで、すでに述べた古代のヴェーダ聖典解釈の学派の中には、水銀学派というのがあった。シヴァ派の一派である水銀学派 (Raseśvara) は、つぎのように説いた。「解脱は不老不死を得て到達される。したがって、行者は生前解脱をめざし、身体に神性を与えねばならない。そのためには、身体を水銀構成にしなければならない。水銀ラサとは、シヴァ神と神妃との結合によって生じ

たものとされ、蘇生などの神秘力を宿しているといわれる。水銀によって身体を変容させ、ヨーガを行じて最高の真理が見られたとき、ラサ（水銀）のみが輪廻の苦を払い、最高ブラフマンと同一視される」という説である（前出 p. 168）。また、ヴィーラ・シャイヴァ派の信者たちは、シヴァ神を象徴しているリング（男根を象徴する石）を身につけていた。教義を特徴づけるのは、師が授け、つねに携帯する神の象徴リングであった。この派の僧はジャンガマ（「可動」を意味する）と呼ばれ、遍歴して説法をした（同 p. 166～7）といわれる。

Moby-Dick の Moby には、太陽や星辰が動く、の意もふくまれ、さらに敷衍して、秘跡の顕現は、季節や時間によって可動である、という解釈もできるだろう。*Moby-Dick* は、抹香鯨をモデルにしているが、その体型は、シヴァ神のリング (linga(m))、つまり、移動するリングそのものである。Dick は、fellow あるいは strong king としての Richard からきたものであろうから、やはり男性の力をあらわしている。俗称では、dick は、男性の性器をいう。このように、言葉の原意にまでさかのぼって意味をとらえる方法が、*ETYMOLOGY* で示されている *Moby-Dick* 解釈法である。文法学派の言語哲学が歴史上存在したと知ることによって、その哲学を少しでも知ることによって、Melville の *ETYMOLOGY* の目的があきらかになり、*Moby-Dick* を読みとくことができることになる。

‘*Loomings*’ の章で多用される、I と C の文字の用法の一例をあげてみる。

Cato throws himself upon his sword. (p. 23)

という文は、I がつるぎを、また C が Cato をあらわすとして、簡略に図式化してみる。すると上の文は、C が I の上にのる図になる。この文に Melville は、修辭的な表現をすれば With a philosophical flourish と形容している。一方、この文に対して、

Quietly I go to sea. (p. 23)

と Ishmael は言っている。この文を同じように図にしてみると、上の文の I と C を横に並びかえただけになる。つまり二つの文は、

$\downarrow \begin{array}{c} \circ \\ I \end{array}$ が $\rightarrow \begin{array}{c} \circ \\ C \end{array}$ になり、

並び方を縦から横にただけの図になる。あとの文にたいして、Ishmael はつぎのようにいうのだが、

There is nothing surprising about this. If they but knew it, almost all men in their degree, some time or other, cherish very nearly the same feelings towards the ocean with me. (p. 23)

この文を、文字どおりに受けとるのではなく、比喩として解釈するべきである。つまり、I が C の中に入っていくという図式は、ここでは、男性が女性の中に、といった意

味になっているのであって、Ishmael は性衝動をはのめかしていることになる。Ishmael がつぎのように言うのも、

It is a way I have of driving off the spleen, and regulating the circulation. (p.23)

同じように解釈すると、抑えがなくなった性衝動を満足させ、体内の循環をととのえる、の意になるだろう。

Call me Ishmael. (p.23)

という第 I 章の書出しは、わたしを性衝動 (Issue+male) と呼んでくれ、という意味にもなる。この文にもまた、I と C の関係が暗示がある。すべての哲学的認識のはじまりは、わたしとは何か、であるから、ローマ数字であらわされた第 I 章、つまり、英文で綴られた *Chapter I* という語句そのものが、すべてはわたしからはじまる、という意味を内包している。I と C の文字がそのようにさまざまに連動しあいながら、物語は、いわば神秘的合一の状態のカタルシスへとすすんでいく。その技法を観察することによって、かくされた H の字の機能があきらかになってくるのである。

V. 'Chowder'

第 XV 章 'Chowder' では、Hosea Hussey の妻が、不在の夫にかわって宿屋の経営をしているのであるが、この女性が Queequeg と Ishmael に、「はまぐりかたらか」'Cram or Cod?' (p.100) と言って、注文をきく。Cod は魚である。魚は聖書では鯨として、神の威力の象徴 (ヨブ記・ヨナ記) であったりする。あるいは、キリストが与える食事、パンとブドウ酒と魚、のうちの一つである。とくに、復活後のキリストは、弟子たちを招待して、魚の朝食を食べさせている。'Chowder' の章では、Queequeg と Ishmael は、いわば聖餐として Cod の食事にあずかっているのである。

その理由として、一つには Hussey のおかみさんは、黄金色の小麦を体現した姿をしているのである。

I was called from these reflections by the sight of a freckled woman with yellow hair and a yellow gown, standing in the porch of the inn, under a dull red lamp swinging there, that looked much like an injured eye, and carrying on a brisk scolding with a man in a purple woollen shirt. (p.100)

金髪と黄色いガウン、顔はソバカスを散らせており、また、Hussey という名には、おかみさん、と、みだらな女、の意味がある。ガウンは寝室用の衣服であるから、おかみさんが多情の女であることを示している。多情の女は多産・豊穡を、さらには小麦からパンを連想させるであろうし、かたわらの紫色の羊毛の服を着た男は、赤いブドウ酒をあらわしているだろう。purple は紫色というより、むしろ紫に近い深紅色 (crimson) であって、ラテン語 purpur = shellfish yielding purpledye の転化であるとされている。へ

ブライおよび古典文学では、dye murex アクキガイから得られる Tyrian purple 深紅色であって、つまり、この男の服は、赤いブドウ酒の色をしているのである。その purple は貝類の一種であるから、‘Cram or Cod’ の Cram にもあたるのである。

Hussey のおかみさんはその男に、お払い箱にしちまうぞ ‘I’ll be combing you.’ といっておどしているが、comb は、羊毛などを梳く、とさらに、櫛状のものでかき回す、の意味があるので、この男が醸造されるブドウ酒、さらには産出される羊毛をあらわしていることになる。

Try Pot 亭の裏庭には、乳牛が一頭放牧されており、その牛は Cod の^{ざんさい}残滓を食っているのである。骨だらけの、不毛の地にいる乳牛と、乳の流れる土地カナンとが対比されているのだが、それは、不毛から豊穡が生じる示唆であるだろう。というよりも、むしろ、ここでは復活後のキリストが弟子たちに魚を食べさせたのは弟子たちが魚となって世の人々に食べられるという殉教の予告であった（ヨハネによる福音書）という寓意が連想されるのである。弟子たちは人々を^{すなご}漁りする者たちとして、キリストに選ばれたのだが、のちに漁りされるものとして、ふたたびキリストに選ばれることになった。Cod を食べることによって、こんどは魚の^{おき}長である鯨によって滅ぼされる。食べる者が食べられる者になり、食べられる者が食べる者になる、という関係がみられるのだが、それはなんのためかといえ、さらなる多くの生産、さらなる生命の豊穡のためと考えるべきだろう。Queequeg と Ishmael は聖餐や秘蹟としての Cod の食事をとった、と考えるべきだろう。Nantucket の骨だらけの荒涼の地に、パンにブドウ酒、小麦や羊や乳牛といった楽園への憧憬がこめられているのである。豊かさは、どのようにしてこの島にもたらされるのか。それは鯨の死によって、また漁りをする男たちの死という犠牲の上に打ち樹てられている、という想いが ‘Cram or Cod?’ の食事に寄せられているのである。

Hosea の乳牛は、Cod の^{アラ}頭を砕きながら、ビッコをひいたように歩いている。いうまでもなく、この情景は、

女のすえは、おまえの頭を踏みくだき

おまえのすえは、女のすえのかかとをねらうであろう。（創世記3：15）

から引かれたものである。これは、楽園追放のときの、神がイヴに告げられた言葉である。魚の頭は、イヴを^{アラ}そそのかした蛇を、牝牛はイヴを、比喩として、あらわしているのだろう。女のすえは…は、人間と蛇との、うらみの関係は、やがて精算されるであろう、という予言だと解釈されている。

では蛇はどこにいるのだろう。Ishmael は、あまりにも^{イキ}生のよい美味な料理なので、Queequeg にむかって、冗談っぽく言う。

... and in good time a fine cod-chowder was placed before us.

We resumed business, and while plying our spoons in the bowl, thinks I to myself, I

wonder now if this here has any effect on the head? What's that stultifying saying about chowder headed people? "But look, Queequeg, ain't that a live eel in your bowl? Where's your harpoon?" (p.19)

この文では、食事をとるのを resumed business と言ったり、スプーンを口に運ぶのを plying our spoons と言ったり、ものものしい言い回しがあって、こうした文章表現が Melville の難解さと考えられているのだろう。ふざけ半分、おおげさと思われがちな表現は、表現の表皮にあたる部分であって、真皮にあたる^{げんしゆく}ところでは、二人が厳粛に聖餐の儀式を行っている姿がかくされているのである。鉢の中にいるのは、うなぎ eel ではないか、早く銚を取って来い、と Ishmael は言うのだが、この意図はなにか。うなぎは蛇にかたち似ている。さきにあげた創世記 (13:5) への、暗黙の言及だろう。うなぎは、その^{ぬえ}鰻的存在から、縮小された鯨である。第 CXXXV 章 'The Chase — The Third Day' で、Ahab は、たしかに Moby Dick を射ているのであって、逃げられたとはいえ、綱 line をつないでいるのである。Ahab が射たのは、Moby Dick の目であった。上の引用文に、傷ついた目のような、にぶい赤いランプが一つ、Try-Pot 亭にはつるしてあった。そのランプが Moby Dick の目の予兆になっている。また、Queequeg が Peleg 船長に腕前を披露したとき、水の上の油滴を鯨の目に見立てていた。Ishmael が Queequeg に、Cod を eel のようだ、銚を取れ、と言っているのは、このようなふくみがあるのだろう。エジプト神話では、ホルス (>horizon) の右目が太陽、左目が月とされるが、その打たれた右目をトトが癒した、と伝えられる。

eel は Old English では、el であった。el とはなにかといえば、アルファベットの L 字、あるいは L 字形のもの、などが、まず考えられる。ところで *Moby-Dick* には、Nathaniel Hawthorne に捧げる、という献辞がついている。Melville と Hawthorne とでは、才能もスケールも大きな違いがある。人格や世間知においても、大きな違いがあるようである。Hawthorne は *Moby-Dick* にたいする称讃の評価を早々に取消したのであるが、Melville は苦しんだのではないかと思われるが、修正もしなかった。Hawthorne の才能にたいする讃嘆のしるしとしてこの書は記された In Token of my admiration for his genius, this book is inscribed to NATHANIEL HOWTHORNE. と書かれてはいる。*Moby-Dick* の手法が、言語の多重性にもとづいているのだから、かならずしも固有の人名として NATHANIEL HAWTHORNE という語句を受けいれる必要はないだろう。*Moby-Dick* という作品は、文法学校・語源学校である、と Melville 自身がことわっているからである。

NATHANIEL は語源として、God has given. あるいは、Gift of God. となる。HAWTHORNE は、HAW+THORNE; HAW は、(廃) 囲い (to catch, fence)、地、庭 (enclosure, yard)、(植) サンザシの実、など。THORN(E) は、(植) イバラ、トゲ

のあるバラ科サンザシ類、とくにセイヨウサンザシ、春に白または紅色の花を開く低木、多く垣根に用いる。また、苦難を与えるもの、真髓、などがあり、HAWTHORNEは、イバラに囲まれた地、しかし春には白や紅の美しい実がつくイバラの地、となる。geniusは、原義では生殖力 male generative であって、根源的な生成力を意味している。そうすると、ホーソンに捧げる、の献辞は、神の与え給うたイバラの地こそ生殖力・生成力の真髓である、といった普遍的な意味内容を示していることになる。楽園追放の意味はなにであったのか、神とはなにか、についての Melville の肯定的な結論が、この献辞の中に示されているのではないだろうか。また、NATHANIEL の EL は、神という意味である。eel の古語は el である。eel は蛇の姿をしており、そのもっとも拡大されたものとして、鯨がある。その汐吹きの姿に、生殖力の根源を見るのは、また海のビヒモスの圧倒する姿に、原罪の根源を感じるのは、ごく自然なことである。人が立ち向かうのが不可能とおもわれるところの、畏敬の念を抱かずにはおれないところの、自然の猛威が存在するのは何故か、とヨブの神が問いかけているのだが、それにたいする Melville の答えが、この献辞の中にあるのではないか。しかし、その答えである生殖は、輪廻の道である。かぎりない、くり返しの道である。輪廻からの脱却は、オリент、古代インドの哲学思想の根本であった。Ahab は、楽園の蛇の投影としての、根源悪の象徴としての、神性みなぎる鯨、を打ち、鯨と顔と顔をあわせるのである。Ahab は、楽園回復と解脱をねがった、一人のアメリカのアダムとしての役柄をになった主人公であった、と言えるのである。創造に破壊はしばしばともなうのであり、両者は、表裏の関係にある。Ahab のような人物設定があるからといって、Ahab を狂気のマイナス志向者であると、きめつけることはできない。表面では、無節操の悲劇であっても、見方をかえれば、改革者としての Ahab がいるのである。人間存在を離脱し、高次の生成へと向かう Ahab がいるのである。

Try-Pot 亭の入口には看板として、大がまが二つ吊るしてある。ごった煮 chowder の調理をあらわしたものであるが、鯨油精製器 try pot が置かれ、宿名になっている。chowder はアメリカの料理であって、caldron 大がま、沸騰している大がまのようなもの、激しい攪乱、からその名がきている。裏庭に乳牛がいて…という言及には、乳の攪拌、チーズの製造のための、といった連想をともなっている。これにはまた、原初生命現象を感じさせるものがある。大がまからは、黙示録の終末の比喻があると同時に、新しい生成、生命を養うもの、秘跡の食事、錬金の変成など、すでに述べた儀式としての聖餐の意義が感じられるのである。引用文の chowder-headed people は、愚か者をあらわすが、視点をかえて解釈すると愚か者とはいえぬ、ということになるだろう。

また、eel から連想されるのは、Cape Cod の地形である。Cape Cod は、Massachusetts Bay と Buggards Bay をはさんで、大きく L (el) 字型に、ゆらゆらと張り出した岬であ

る。Martha's Vineyard 島と Nantucket 島を足下に置き、*Moby-Dick* の中でさまざまに象徴として使われる地名の、New Bedford、Fairhaven、Gay Herd などの捕鯨港を従えているのである。少し離れたところに、Long Island 島の Sag Harbor が鋸^{のこぎりば}歯の口を開けて迫っている。

VI. ヨブ記と *Moby-Dick*

ヨブ記の解釈をめぐるのは、ヨブ記のあまりの不条理さ、不可解さに、とまどうばかりであった。ヨブの神の横暴さ、正義のなさ、なんの罪もないヨブを虫ケラ同然に踏みつけて、平然と自己の力を誇る神、このような神を人はどのように受け入れるべきだろうか。C.G. ユング (Yung) は『ヨブへの答え』(ヨルダン社)で、この神に痛烈な批判をこころみている。それはともかく措くとして、神は愛なり、正義なりといった神概念は、新約聖書になって前面に押し出され、そのため、キリスト教は世界宗教として、また、普遍宗教として、精神のもっとも高い高みに登ることができるようになったのはいうまでもない。しかし、ヨブの神の、あの粗暴さ、横暴さ、は、今もなお、神の属性であることに変わりはないのである。自然の脅威、人間の心の非道さ、などは、神の属性を反映するものであるからである。崇高なるもの、美しいもの、これらが神の属性であるのと同じように、それらと正反対のものも、神の世界に属するものだからである。人が神の似姿であるということは、神と人はたがいに鏡に映る自分の姿に向きあっていることになる。人には、神のものである不死性の原型が内蔵されていることになり、また神にも人間のもつ制御しがたい激情、正義ならざるもの、不条理、などが内包されていることになる。

したがって、人にも神にも無限の高みと、無限の低さが可能性として内包されているのである。ヨブの神を理不尽であるといって、おどろくにはあたらないのである。では、人間の魂が高くあげられ不死にいたる方法は何かといえば、一つにはヨブの生き方をあげることができる。しいたげられても、義人であることをやめない、という選択である。苦しみに徹底して耐え、節操をまげないとき、そのどん底は神と並ぶほどの人格の高みにいたる通路である。ヨブの教訓は、このように読みとることができるだろう。ヨブは主のしもべの一人として、また、メシアの出現を予測するものとして解釈されているのであるが、結局ヨブは償われて、その後140年間生き、生涯あわせて240年あるいは248年生きたとされている。最初の息子たち、娘たちはどうなるのかと考えると、疑念は残らざるをえない。しかし、ヨブは、70人訳では、つぎのようにつけ加えられている。

“And it has been written that he will rise again with those whom Jehovah rises up.”

ヨブは、エホバが蘇えらせる者たちとともに再び立ち上がる、とされているのである。人の不死性が、その方法が、ひそかに示されているのである。この点について、さらに

解釈をこころみしてみる。

ヨブ記は、聖書の中でも、もっとも難解な書の一つといわれている。解釈しがたいのは、神が人間よりさきにつくられた被造物の河馬やワニ、じつは鯨をさしているのだが、そういった自由意志をもたぬ、無自覚の動物の強大な力を、自然の破壊力を神が誇っている点であるだろう。短い有限の生命をもつ人間に、無限の過去にあるかにおもわれる創世の秘密を知っているか、と神は人に問うのである。神の力と知識のあまりの広さに、あまりに微小なヨブは圧倒されてひれ伏すのだが、神のこの問いには、秘められた意図があるのではないか、ひそかな突破口があるのではないか、とおもわれるのである。コップのごとき器でもって大海の水を測ることができるのではないか、という示唆が、この神の問いかけには感じられるのである。

わかるなら答えてみよ、という問いかけにはメッセージがあって、わかるはずがないから答えられない、という否定と、わかる方法があるので答えることができるのだ、という肯定との両義の解釈が可能である。神の人間にたいする挑発は、謎かけ、であるかもしれないのである。

人は神の似姿であるといわれる。それなら、人は、受信機としての器になって、限りなく、神から知識を汲みあげることができるはずである。霊的直感によって神の知識を知覚するというグノーシス (gnosis) の考えが、これである。そして Melville は、*Moby-Dick* を構築することによって、ヨブの神の問いに答えようとしたとおもわれるのである。ヨブは弁明をおえ、長老たちも語りおえて、沈黙してしまった。彼らの人智では、それ以上の知恵はうかばなかった。それまで黙って一部始終を聞いていたエリフという若者が、いきなり語りはじめた。その言葉は、ヨブや長老たちの知恵をしのぎ、神の威厳にみちていた。神の代弁者としてのエリフが巫者・シャーマンであるのは、あきらかである。エリフは、神の知識をわがものにできるのである。近代に入って人間中心主義の超人思想もあったが、Ahab がこの範疇に入るとはいいがたい。Ahab は死が目的であり、変成をねがっているので、彼のばあい、中世の錬金の神秘思想にむしろ近い。シャーマンとまではいかなくとも、人は瞑想によるなり、なんらかの方法で神と交感し、神の知識を受けることができるのである。ユダヤ教・キリスト教が、シャーマンたちを介した文書宗教であるのが、その例である。

ヨブ記と *Moby-Dick* との関わりについて述べる。まずエリフが神のさきがけとして現われて、語る。

日を重ねれば賢くなるというのではなく、
老人になればふさわしい分別ができるのでもない (32:9)
言いたいことはたくさんある。
腹の内で霊がわたしを駆り立てている。

見よ、わたしの腹は封じられたぶどう酒の袋
新しい酒で張り裂けんばかりの革袋のようだ。(32：18-19)
さてヨブよ、わたしの言葉を聞き、
わたしの言うことに耳を傾けよ。
見よ、わたしは口を開き、
舌は口の中で動き始める。(33：1-2)
答えられるなら、答えてみよ。
備えをして、わたしの前に立て。(33：5)
神はそのなさることを
いちいち説明されない。
神は一つのことによって語られ、
また、二つのことによって語られるが、
人はそれに気がつかない。(33：13-14)
ヨブよ、耳を傾けて
わたしの言うことを聞け。
沈黙せよ。わたしに語らせよ。(33：31)
言うことがなければ、耳を傾けよ。
沈黙せよ。わたしがあなたに知恵を示そう。(33：33)
知恵ある者はわたしの言葉を聞き
知識ある者はわたしに耳を傾けよ。(34：2)

上の引用法から、エリフが神の巫者であるのはあきらかである。これらの言葉には、微妙に伝えられている情報があって、それらは言葉(verbally)によって明確に伝えられるのではなく、暗示や謎めいた出来事や現象によって、婉曲に示されるのである、と述べられていることである。神が直接、人の姿をとって語りかけてこられる場合は、聖書の中でも、きわめてまれである。そのきわめてまれなヨブ記にあってさえも、暗喩でさまざまな情報が神から人に伝えられるのだと、引用のエリフの言葉は言っているのである。もう一度くりかえすと、

神はそのなさることをいちいち説明されない。
神は一つのことによって語られ、また、二つのことによって語られるが、
人はそれに気がつかない。(33：13-14)

だからエリフは、つづけてこう言っている。

知恵ある者はわたしの言葉を聞き
知識ある者はわたしに耳を傾けよ。(34：2)

秘密の情報を伝達するから、よく注意して解釈せよ、とエリフは言っているのである。それは何か。暴風がどうの、海の大型動物がどうの、などというようなことと、ヨブの試練とが、どのようにつながっているのか、よく考えてみなければならない。ここで語られる自然現象の中に、謎かけがあるのではないだろうか。

エリフも神も、くりかえし挑戦的とも受けとれる問いかけを与え、自然の現象のどの

点に想いをめぐらせるべきかを、詳細に指摘している。

ヨブよ、耳を傾け

神の驚くべき御業^{みわざ}について、よく考えよ。

あなたは知っているか (37:14-15) (エリフによる)

わたしはお前に^{たず}尋ねる、わたしに答えてみよ。

知っていたというのなら

理解していることを言ってみよ。(38:3-4) (神による)

これらの質問は、人間にとっての不可能な事象を、神が誇示していると考えるべきではない。文字どおり、質問であるのではないか。それも、答えるのが不可能ではない質問ではないだろうか。人間という器が、神の似姿であるなら、人間がその小さな器に、無限の、神の知恵や知識を映しとるのは、不可能ではない。時間をかけると、多くの自然法則や科学の知識が知られるようになるだろう。器が小さいといって嘆く必要があるだろうか。エレミヤをはじめ、聖書の中の深い嘆きの中には、かならずといってよいほど、救いの予兆がかくされているのである。メシヤの到来を告げるとされる個所は、ほんの二、三の隠喩で示されるにすぎない、それでも、ヨブも永遠の生命をさずかった、とさえ記述される文書がある。

ヨブ記の自然描写のなかに、秘中の秘としてひそかに語り伝えられてきた、光にいたる道の示唆が見られるのである。Melvilleは、鯨の象徴について、*Moby-Dick*を書いたのであるが、その主題とするところは、ヨブ記の自然についての、神の質問にたいする一つの答えを、示すことであった。*Moby-Dick*の作品巻首に掲げられた銘句・題辞として、創世記ほか鯨についての記述、と、ヨブ記の自然描写などから、つぎの言葉が引用されている。

“And God created great whales” (*Genesis*)

“Leviathan maketh a path to shine after him; one would think the deep to be hoary.” (*Job*)

“Now the Lord had prepared a great fish to swallow up Jonah.” (*Jonah*)

“There go the ships; there is that Leviathan whom thou hast made to play therein.”

(*Psalms*)

“In that day, the Lord with his sore, and great, and strong sword, shall punish Leviathan the piercing serpent, even Leviathan that crooked serpent; and he shall slay the dragon that is in the sea.” (*Isaiah*)

ここには、秘跡の道はある、と語られているのである。太陽の運行や、季節の移りかわりを観察し、その法則を知れば、秘跡の道は、いつ、どこに現われるかがわかるというメッセージが、これらの引用文にはあるのである。

使用テキスト *Moby-Dick or The Whale by Herman Melville ed. by Charles Feidelson, Jr. (Bobbs Merrill 1980)*